

フードトラックインフラスラクチャー
移動販売にまつわる食の流通拠点の提案

東京工業大学 岩下 隆平



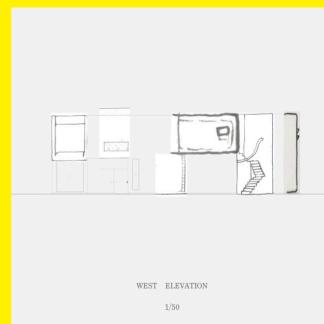
近年、未利用の余白を活用できるフードトラックが都市に見られるが、それらはどこから来てどこに帰るのだろうか。通常の飲食店と異なり、仕入れから提供までの工程が都市に離散している現状から、フードトラックのインフラとなる拠点を車のスケールと動線を宿しているガソリンスタンドを改修することで提案する。補給する対象が石油から食材へと変わると、石油タンクがあった地下は食材で満たされる。均一でフラットな大屋根の下に個性的な勾配屋根が連続的に現れ、車のためだけに使われていた無機質な空間は食を介して人々が繋がる空間へと変容していく。



vogue
東京藝術大学 角野 キラリ



流行は、ふとした瞬間—都市においては、建物の隙間を覗いたり、ショーウィンドウを姿見がわりにつかうときーに立ち現れる、「わたし」の姿をめぐる{みる／みられている}の関係性に起因して始まるのではないか。銀座にある街区の内側に、身支度をするというシクエンスをもつ建築を既存の建物に寄生するように展開させる。これらは銀座の情景を断片化する都市構造によって、表通りから見るとある瞬間〈un moment〉に変わり、都市の景観を仕上げていく〈vogue〉な建築になりうるのではないだろうか。



斜面に戻す、斜面がつなぐ
東京大学 今田 木葉実

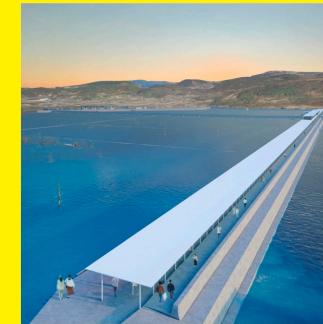


1960年代に丘を切り開き宅地造成された郊外住宅地・横浜市青葉区美しが丘は、世代交代による更新の時期を迎えている。この地に、住宅の建替とともに移動をはじめ様々な問題を抱える「擁壁」を斜面に戻してゆく段階的方法を提案する。まず住宅のモデルや建蔽率の再考から斜面での暮らし方を提示し、さらに斜面に更新段階に応じた機能「地域コア」を点在させてゆく。例えばゴミ捨て場は敷地同士の行き来を生み、モビリティハブは水平移動を、EVは垂直移動を支えるなど、住宅に付した小さな「地域コア」がまち全体をつないでゆく。



残片の再考 - 都市の線形空地における
開削と表層に関する考察 -
東京工業大学 小野美史

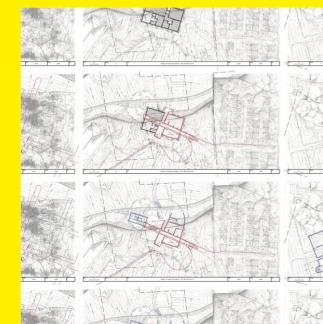
長い間放置されがちな都市のインフラ跡では、残存した構造物が街を分断してしまう。これは縦割りの計画により包括的検討が困難であるため、まず敷地の横断面を描いた。地中には建物、基礎、植物が一樣に根付いているが、新しい地面として作られたインフラ構造物はその地を途切れさせていた。そこで人と繋がる都市の表層である手摺、ペーパメントなどに着目し、また高架の下を開削し、新たに人々が根付く共通の地を作ろうとした。人工物と自然物は対立するものではなく、相互に影響を与え合うものとして残片を再考した。



STATIC/DYNAMIC STORAGE -瀬戸内海沿岸・牛窓における塩田跡地の
再構 -
東京工業大学 近藤 卓海

かつて塩業のために堤防を築き拓いた海から獲得した土地は近代化に伴い役目を終えた。堤防は内外を絶する器として残り、人間の管理放棄により土地は水没しディストピアと化した。本設計では観測点の挿入および脱ディストピアへの変遷を設計する。浄化の足跡やかつての人間活動の壮大さは静的なモノとしてこの場に、土地を海へ返還するまでの変遷はこの場の足跡を表象する動的なアーカイブとして観測者に蓄積される。こうしてこの場は静的かつ動的な記憶装置として機能するとともに人と海との接点として在り続ける。

断片、断片と断片のための
東京藝術大学 三輪 和誠



返還される米軍住宅地区。放棄された住宅と敷地境界線という、実態を喪失しつつある実在と、実態を獲得しつつある不在。これらが時間的に交差する特異な状況の中で、内部に敷地境界線が存在してしまった3つの小さな住宅は、どのような変化の過程を辿るだろうか？

このプロジェクトは、この一連の流れの中で、これらの対象がいかに変容し、同時に対象とその背後にある地誌的文脈や過去の事物との潜在的な関係性を明らかにするか？という、建築的プロセスの描写を通じた、ドキュメントとしての設計行為の試みである。

体験の相対化
東京藝術大学 南 昴希

この設計物は「Men's Sheds」と呼ばれる単身者の孤立支援のための施設として計画される。その傍で、敷地を取り囲む建物の素材や地面などのオブジェクトたちは、それそのものとして意識を向けられることなく、日常の端に背景として存在している。その背景たちが前景化するような設計を1枚のドローイングに描き起こし、その空間の集積で建築を作る。計画が必要以上に建築を固定的なものにしないために、一連の操作によって意識を向けられた「元背景」たちが、計画された建築の経験に振れ幅を作り、不意のアクションを引き起こす。

計算博物学序説
東京大学 上條陽斗

工学的研究によって発見される自然に存在しない対象を博物学的に収集、整理して位置づけを明確化する知の枠組みとして「計算博物学」を提唱する。計算機時代の学術の土壤を育むことを野心とし、ものの形の取りうる可能性全体を含む設計空間についての洞察を得ることを目指す。計算博物学的な記述のためのフォーマットを提案し、自身の行った複数の研究と関係づけられる研究を標本化して位置付けた立体展示を制作し、自身の研究の位置づけを明確化すると共に、知の枠組みの提案がもたらす新しい空間の形式を探求した。



飾る宝の入り来る港
東京大学 田崎祥

港湾は近代化とともに都市から切り離され、不可視の場所として扱われてきた。同様の現象が生じている横浜港に対して、埠頭にコンテナヤードを新設し、そこに客船ターミナルと保税オークションハウスを挿入する。オークションで取引される前の美術品を、流動するコンテナの狭間に展示し、展示される美術品自体も取引に合わせて流動する。客船ターミナルを行き交う人々は、コンテナと美術品の合間を抜けながら手続きを行う。港湾のダイナミズムが空間となり、物と人の流れが交錯する建築。